

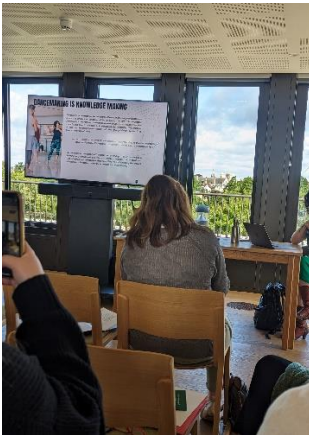
コロナ明けの久し振りの OXFORD

2023年7月20日 白田由香利

コロナのロックダウン中は渡航が全くできず本当に辛かったです。国際会議も ZOOM 開催ではどうも達成感が少なく、対話ができないことが問題です。この3月初めてバルセロナに院生と国際会議におっかなびっくり心配しながら渡航を再開し、この7月に OXFORD にやっと帰る(?)ことができました。サバティカル休暇で2006年から2007年、OXFORD 大マートン校(Merton College)の visiting scholar として OXFORD サマータウンに住んでいたのので、土地勘はあります。



<シンポジウム>



Oxford Educational Research Symposium に参加するためやってきました。場所は St. Hildas College(セントヒルダス校)の眺めのよい Rooftop Room でした。本当に眺めがよく OXFORD を一望できました。自分の発表の冒頭に

I would like to say thank you for this beautiful organization. I was a visiting scholar of Merton College. So I think this place is the best place to see the whole Oxford. Thank you so much.

と、お礼を言いました。教室の大きな窓から大学教会やマートン校などの塔がよく見えて、うっとりするような感動を覚えました。一般的な国際会議と違い、少人数の研究者(院生発表は原則なし)だけが世界中から集まって、ガンガン議論をする、そういうタイプの OXFORD やケンブリッジでよくあるタイプの



集まりです。休憩のコーヒータイムも長めにとってあり、ずっとガンガン議論をしているので、英語が苦手な人にはいたたまれないようなある意味こわい場所です。私も体力使いながら、よくしゃべりまくりました。今回の私の発表は、インドネシアの州別データを用いて、Gender equality 男女平等の達成に有効な要因は、(1)教育、(2)トイレの普及、(3)携帯電話の普及、のどれであるかという AI 手法(回帰プラス SHAP アプローチ)による分析結果でした。結論は、「最近になると教育よりも携帯電話の普及が、より高い重要性をもつ」でした。教育は時間がかかるけれども、携帯電話は女性の社会進出に役立ってくれる、というものです。主張としては、「携帯電話の操作の教育とそのセキュリティ教育をしっかりとすることが女性の社会進出に役立つのではないのでしょうか」という提言でまとめました。テーマがシンポジウムの意図に合致するかどうか心配していたのですが、反対意見はなく、興味をもって聞いてくださって、大変好評でした。拍手の量で、受けたか受けなかったは分かります。その後の議論で、我々のチームでインドでも同様の SDGs 達成度の分析をしている話や、インドとインドネシアの COVID で一番人が死んでいた時期の両国の twitter で何が話されていたかの分析をした話、などをしたおかげで、私は humanitarian standpoint 人道主義的立場で研究分析している人と見られたようです。私の研究のメインテーマは AI 手法による企業分析と株価分析です。このタイプの集まりは参加者同士で話す時間が多いので、共同研究の話もまとまりやすく、アイルランドとスペイン、マドリードの先生と今後共同研究をしましょう、という話になりました。これは私にとって大収穫でした。

<マートン校>



セントヒルダス校は、市街地を通るハイストリート High Street の端にあります。The Plain という名所旧跡の隣にあります。朝、目が覚めて、バスに乗り、途中でサーモンサラダとコーヒーを Pret で食べ、橋の上から川の鳥にパンをちぎって投げる。住んでいたところと同じことをやると、自然とあれこれ OXFORD のことが記憶に上がってきます。体が自然にバスを止めるために、手を下前方に出す、とか、古い友人と会って話していて lovely を連発するとか。Mrs Stanworth は私の得難い友人で、実は

この4月に日本にご主人と遊びに来ていて、うちの夫婦と4人で京都嵐山で桜見物をしました。大覚寺と大河内伝次郎山荘、天竜寺

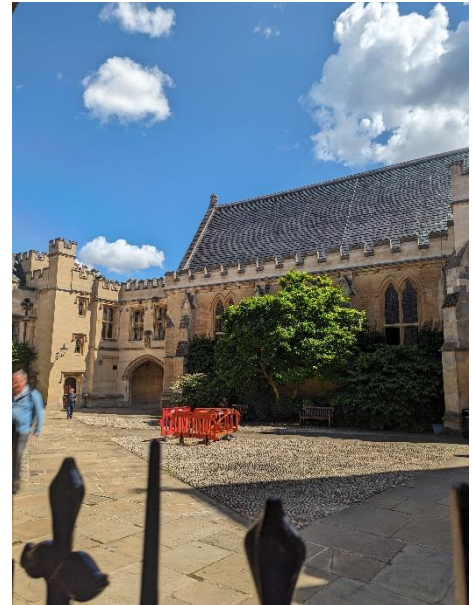
というコースです。本当にコロナ明けで、古い外国の友人と再会できる、ということは素晴らしいことです。ハイストリートから Merton Street に入ったところに、マートン校があります。一般にヨーロッパの石畳は歩くのが大変ですが、マートンの石畳は、丸いのがった石が敷き詰められていて人が歩くには適しません。あれは馬車で来る人のためにはいいのかもしれませんが。ちょうど、代々木上原の児童公園にある、足の裏のつぼを指圧するためのでこぼした石、の感じです。ともかく、歩くと足の裏が痛くなってきます。2005年だったか、サバティカルの許可をもらうため、校



長先生の Dame Rawson にご挨拶に行ったとき、「ブーツをはいて



くればよかった」と後悔したことを思い出します。校内はまったく変わっていないように思われました。白田ゼミの学生のお土産はこの絵葉書と前々から考えていたので、1枚0.5ポンド(安い)のマーTONのダイニングルームの絵葉書を40枚買ってきました。ハリー・ポッターの hogwarts 校のダイニングルームのような感じです。



学生の皆様がしっかりと勉強して海外雄飛してくれることを願って、絵葉書をお土産にしました。

そして、念願の Oxford Blue のインクを買ってきました。コロナ下で、新型コロナが現れて次から次へとイベント中止で家で落ち込んでいたとき、「絶対にサバイバルして、また、Oxford に行って、Oxford Blue のインクを買う」ことを夢にみて頑張ってきました。ハイ・ストリートの万年筆専門店に入り Is there any bottled ink of blue which is



similar to Oxford Blue? と聞くと、そのものずばりの Oxford Blue のインクを出してきてくれました。これは嬉しかったです。ガラス瓶は旅行鞆が重くなると心配していたのですが、小型のプラスチックボトルでした。OXFORD でも、少しは中世から変わっているのだと思いました。



これは軽くて助かりました。Feed a duck (川の鳥にエサやり) もしたし、インクも買えたし、まさにドリームカムツアーでした。あとは、OXFORD で最も有名な書店 Blackwell's に行って ChatGPT 関連の推論の本を探すことです。店員さんに聞いて、探してもらいましたが、結局なし。無し、でいいのです。これから自分が研究しようとするテーマが本になっていたら困りますから、少なくとも本が出ていないことで安心しました。Blackwell's 本館の2階のティールームで前のシェルドニアン・シアターの彫刻を

見ながら一息いれる、これも達成してきました。お金がかからない、やりたかったことを全て達成でき、本当に幸せでした。（飛行機代が高かったですが）



今回 OXFORD に戻れて感じたことは、人間に、お金と時間と気力があれば、いつでも変わらずそこに存在している夢見る街が存在する、ということでした。コロナが来ようと変わらず存在している、その不思議な魅力。日本でいうと、京都がそのような感じかと思います。OXFORD のどこを見ても、今より若かった自分が6歳の子供をつれて頑張っている様子が走馬灯のように脳裏に浮かび、なつかしかったです。同じ経済学部のア教授と子供2人をマートン校の庭で遊ばせた(親は必至に止めたのですが、子供たちが小さくて勝手に、だるまさんがころんだ、を始めていた)思い出は、今もうっとりするような思い出です。子供をつれてサバに行くのは大変です。今この年で、あれができるかという、なかなか疑問です。海外雄飛するには気力が必要です。若い頃しかそうした爆発的なパワーはでにくいでしょう。若い皆様はぜひとも英語をしっかりと学び、海外に目をむ

けてください。

以上